



“幼児教育の危機” に対する反省

秋 山 ち え 子

“幼児教育の危機”が「幼児の教育」のような専門誌にとりあげられているが、本当に“幼児教育”は世間から忘れられているだろうか。

私はそうは思わない。

“幼児教育の危機”という言葉は、“幼稚園教育の危機”とおきかえられるほうが適切ではないかとさえ思う。ここ十年間に、作業教育とか情操教育とかいろいろいわれた。それぞれの教育の主要性はあらゆる機会に説かれたが、どうも直接その渉にあたる人だけが踊っているといった感じである。ところが、幼児教育は、P・T・Aや社会教育などで、みっちりと勉強させられた母親の一人ひとりが、

幼児期の教育がいかに大切かを知り、真剣にこの問題にとくくみはじめている。

やさしくかかれた“幼児の心理”や“幼児のしつけの本は、出版すれば、はずれることがないという定評や、最近、地域によって、P・T・A連合会などで“就学前の子ども”の教育活動がされていることなど、幼児教育の重要性が行動にあらわれたものとみてさしつかえないと思う。

もっとも、一か月に一度ぐらい小学校に幼児を集めて、学校生活にしたしませるといったことをしているP・T・A連合会の幼児教育は、ともすると『さあ、静かにしておねえさんやおにいさんのし

ていることをみるんですよ」といった式のものになりがちで、自発性を全くおさえられた幼児が気の毒になることもあるが――。

一時、われもわれもと幼稚園に子どもを入園させ、幼稚園ブームといった現象をつくりあげたのも、母親の、社会の、幼児教育に対する自覚がさせたことである。

それが、二―三年のうちに幼稚園の入園希望者が減少して、幼稚園教育の危機などと叫ばれるようになったのは、一体どうしたことなのだろう。

ここらでしつかりと幼稚園教育の根本から考えて、しつかりした態度をもってかからないと、それこそたいへんなことになりそうである。

× × ×

まず第一にあげられるのは、為政者の官僚主義。

地方財政再建に関する法律を適用されることになった市町村が、最初に手をつけたのは、市町村費による教員給の削減であった。

役所で働く人にとって何よりも大切なのは、帳面スラの美しさである。このテイサイを整えるとき、いつも犠牲になるのは、一ばん弱いところで暴力も振えず、弁説もサワヤカでない幼児を対照とする教育など恰好なエジキである。

予算がへれば、幼稚園教諭の数もへり、設備なども理想のものか

らはなれる一方である。環境の整備されていないところで、りっぱな教育ができないことは誰でも知っている。予算をけずった役人でもよく知っているはずである。

それを、あえて、見て見ないふりをしてすませてしまふ官僚根性に対しては、世論の力で何とか反省を求めることが必要である。

× × ×

幼稚園教育の危機は、このような外的条件も大きくものをいうが、それより前に反省されなければならないことは、内的条件、つまり、幼稚園教諭に対する信頼の問題があると思う。

もっと端的にいえば、幼稚園入園者がへっているのは、幼稚園教諭に対する母親の不信のあらわれである。

完全な教育は、まずりっぱな教育者がなければならぬ。幼児教育の重要性が認められているにもかかわらず幼稚園教育の危機に対して役所の予算をかえるほどの世論がないというのはどういうことを意味しているのだろうか。

もしも、幼稚園に入園させて教育するのが幼児にとって最上の道であるときまっていれば教育熱心な母親たちは、こんなに黙っているはずがない。幼児教育は、小学校教育に比べて、字を読み書きしたり、数をかぞえたりといった技術的な面より、精神の発達にそつた指導の面が多い。

これを見ると、たえず勉強や研究がされていなければならない

ずなのに、小学校に比べて、結果がすぐはつきりとあらわれてこないものなので、研究や勉強が忘れられがちである。しかも、幼稚園教諭の九十九・八パーセントまでが謙虚でツツマシやかな女性であることが、それに拍車をかけていることも否めない。

遊びの中に、教育の目的がいつもやんわりと考えられていなければならないはずなのに、はなはだしいところでは、幼稚園の生活のすべてが遊びそのもので、教諭は女中の存在である。母親とは、自分の子どもにしか目がいかないもので、ヨクバリである。あれこれと、非教育的な要求をしているのをみかける。

ところが、それに対して、教育者の立場から、理路整然と、しかも感じよく、母親を納得させられる人が何人あるだろう。

こんな状態では、心ある母親だったら、いくらビアノがあっても、遊び道具が豊富でも、不安で幼稚園にはいかせたくないと思うのは当然のことだろう。

親が教師に対して抱く不信の一つの原因として、親からの物質的援助をうけることに馴れ過ぎていることもある。

これは、小、中学校でも同じである。終戦直後の物資不足の時代の「助けあい精神」からならいざ知らず、もうその時期は過ぎていくはずである。

人間は何といっても弱いもので物質的援助をうけることによって

生ずる心の負い目は、ときには、教育本来の目的からはなれたことに對しても、目をつむってしまうような場合も起こしてしまう。

待遇が悪いのなら、堂々と経営者と話しあうべきで、組合などそのためにあるのだ。どうしてもなくてはならない先生方だったら、国民は待遇の改善にも協力を惜しまないと思う。よく、もう少し月給がほしいと思うけれどそんなことをしたらツブれてしまう」という声もきくが、そうかといって、教育者としての誇りまで捨てるようなことをして、何でりっぱな教育ができればうか。

たいへん意地の悪い方をしたが、何はともあれ、幼稚園の教諭の質の向上は、危機にあたって一ばん考えられていいことだと思う。

× × ×

つぎに、幼稚園教育の危機は、セクショナリズムに問題がある。

同じ日本の幼児なのに、何と千差万別の城を築いていることだろう。

幼稚園、保育所、簡易保育所、その上、公立、私立など、それぞれが、自分の立場を守ることだけに大声をあげている。

幼稚園では、きれいにアイロンのかけたエブロンをかけ、バス

ケットをさげてくるのが幼児であり、保育所では、親は生活のために働き、一日放り出されているのが幼児であるといった具合に、幼児の本質的なものでちがって考えられているように思えることもある。

公立は公立、私立は私立で集まってはいるが、日本の幼児を対照にして問題別に研究会を持つことなどあるだろうか。

また、幼稚園、保育所の人たちが同じ幼児教育をする人として、待遇のことなど真剣にとりあげて話しあったことなどあるだろうか。

女性が多いということで大損をしているのに加えて、この、まとまりの悪さでは、幼稚園教諭の地位の向上などいつまでたっても夢物語である。

また、このことは、幼稚園教育の危機を招く一因をなしているし、危機をのり越えるのにたいへん障害にもなる。

×

×

×

最後にもう一つ。いま、日本に私立幼稚園の数が多過ぎること。

幼児教育は、家庭が主体になって地域社会の人びとによってされるのが理想で、教育に理解を持った母親がいて、近所に遊び仲間があれば、ここで十分に目的は達せられるはずである。

幼稚園にいく子は、一人っ子で幼児の社会生活が十分にできないとか、環境が悪い子などが主になるのが理想ではなだろうか。

そして、大切な幼児教育は、多少とも利益を目的とした経営者にまかせられるべきでなく、国の費用を持って、幼児教育の場が整備されるのが当然と思う。

幼稚園令が小学校と関連を持ってつくられているのに、幼稚園に通う幼児が日本中で二・三割ということも、おかしいことである。幼稚園が義務制になるのがわれわれの最終の目的である。

その世論をつくるためにも現在幼稚園教育にたずさわっている人のフンキを祈りたい。

(筆者は評論家)

評

書

幼稚園における指導の実際 ①

——健康を主とした一日の指導——

▲ 文 部 省 編

印刷も、りっぱで、内容も豊富で、とても読みやすい上に、本書には、類書にないような特長があるように思う。サブタイトルに「健康を主とした一日の指導」とあるが、当然なこととして、園の目標の全領域にわたる一日の指導の計画と実例がのっている。端的に言えば例の六領域にわけた精密な(?)叙述がないところに、この書の第一の長所があると思う。健康とか、社会生活の指導というものは常に全面的総合的に行われるものであることを、よく物語っていると思う。それゆえに、その記述が非常に現実的実地的になっている。(坂元彦太郎)

<フレーベル館発行 A5判 340頁

112 円>